

日本書紀

四五六月
四





日本書紀卷之四

夏

澤書律曆志の云く夏ハ假ナリ假ハ大ナリ夏物假大ナリ
との云ふなり尔雅云夏と特略と云〇和修亦云と云つと云せ
一ハあつと云ふに云ありを
あとおぬす野野乃義と云る

素問の云く夏二月これと蕃秀との云は地氣交り
穀物蕃茂す夜ニ臥し寐く起せず厭於日忘す
て然るるなりと云へ先英華と云へ夏秀を成し
夏氣と云へて此と云ふと云へ此果く出し果く
出しと結ぶを掲げ夏氣在る亦行て
此れ送るこれと送るはと云へて
者か

日本書紀卷之四

平金方よりく丸を乃る面とありてて好むなりき
人として面皮あつて癩をまゝ又面風とあるべし

又曰文七中二日若くは代食物とふ記辛をすして
肺をとるあり

肉をいづく交月冷石鉄拍をくと枕を添とある
たうれたに人の目と換と

書生徹よつく交代帯を契ありある菽を食ふ
これとを換と契よ一なるべし

金匱要略よりく交徳禽獸の心と食ふると忌みく
列子我靈を犯さん害す若くは食して

これと書と

月令度義よりく交九月より下りあり一切濁物
及水とのむると忌み又あるは盛潔とく

又よく交尿管氣衰後とある房色交とれバ元
氣と傷り毒と換は宣戒之

又よく汗乃衣裳と透りて日お晒し又これと忌
出ハるる痛子と生れ

書生書にりく盛暑を徹を冷水をく日と洗
す又脈と乾枯をむくくや沐浴とるを切

禁食へし又冷みありと潔へし

又とく夏は暑時を石れ上に生ずとへくす熱とれは瘡
とまー冷あまを瘡と生ず

又曰夏月ハ心胆ノ腎衰ハ精化して水となり秋亦心
火凝丸保膏して滋氣を固と一考又熱物とくハ
脈中澄暖あり生肌果荔枝氷冷淘粉粥蜂蜜丸食
へく冷氣と食とれは多くハ秋時ハ必瘡疔とうきふ
冷水とみく淋瀝一洗面と洗ハ腎ノ淋く事さるれ
人をして憂鬱眼眩く筋脈厥逆一霍乱攪筋冷黄
乃瘡とゆせむ風ノ漸く外するれ眠亦人臥
去る扇と揮しむら事かうは汗疎毛孔開展去る風

入るこれとせハ人として風痺不仁言俗寒濕の瘡
と熱む新物にして即暑とるさひくさく亦病根
を種あり氣衰方人を授教乃暑ノ毒とるうじ
酸中より一とこれととく

孫ま人くもく夏月肉は伏陰有り冷水との瓜地生冷
の相宜く少く食しかくれさくもれて秋冬瘡疔
とまつて事とまぬる

夏月暑ハ傷くまも身弱たれく瘡とる人有り瘡
これと夏瘡とくまも病瘡よりまも業と眼す
又万葉集十の巻六伴家持吟嘆瘦人哥よ

石麻呂爾吾物申夏瘦尔吉跡云物曾武奈使
取食 纒纏至乃夏瘦と治と事簡書した
見えゆけしけよきと云事あり

四月 亥卯に月ハ新州渡を四月の中○四月ハ長冬 孟夏 余月
乾形 徳と仲夏と○四月ハお多と卯辰と云わのむ書た
ひつちゆへーうれれ月とよと
略せりと奥義抄よきと云

朔日 國信今日より八月に日まて 給と恙ゆとひとと家

かといふ古言にゆかくと云り

八日 浴佛日あり 浴佛とていふは 浴佛とはいふ浴と
ふよ都梁香といふ書夏水と 前金香といふ書
色と云一丘降香といふ書 伊奈水と云 浴子香とい

て 黄色水と云 安ん書といふ書 夏水と云 佛頂
浴くと云一り 月建此浴と云ハ 洗ふおふと云一ぬ
本朝より今日佛よ水と浴せしむりる 推古天皇
の御まよりと云一まんしと云

十五日 浴屠の結夏今日よりと云一すりて七月十五日
よりて終り是と解夏と云い万九十日 曼唐云外
よあす多木虫 野々と云一と事とねと云一と云
たりや 新苑家規より云一と云

昨日 沐浴
今日 梅雨よ先と云て 庭の海と云一と云一と

田舎屋敷より入るるげよ春を暮るる梅屋敷志多く六月を
 梅屋敷より六月の初めと久く早の梅屋敷これとさうい日
 と云天守より日をもつ時手もさう屋宅と修理して
 功多くされハ唐古典と定役三功とて造修修理を
 せ給ふ時修り事とのきり四月より七月より八月と
 と云二月三月八月九月を和功と云十月より四月
 ありてと短功とすといふありて五月は日ありて
 修修を功多ししてありてそののさうい下一又六月
 梅屋敷より梅屋敷よりありて梅屋敷これと卯の花屋敷
 又卯の花屋敷よりありて

六月天氣より梅屋敷書書と日記にしてありて
 今紙より糊とつけし書書をたより梅屋敷の梅屋敷
 とひもめはこれの梅屋敷と月令度書よりあり
 衣服と志ありて梅屋敷の梅屋敷ありてありて
 日よきとせハ梅屋敷と梅屋敷と梅屋敷と
 此月ありて一と梅屋敷と梅屋敷と梅屋敷と
 てこの書とありて二つありてありてありてありて
 入桶より入り上ふ書と梅屋敷と梅屋敷と梅屋敷と
 けりて一又筆と梅屋敷と梅屋敷と梅屋敷と
 腕一梅屋敷と梅屋敷と梅屋敷と梅屋敷と梅屋敷と

よく解あり塩平ハ塩湯はくゆひなるハ湯はむ
— 薬— と形家此用はるなり

正月より二月までの間は大豆大粒を炒りて胡椒をすりこぎ
純陽の月をまじり精氣を保養して心海をくわすは月令

虚寒よとせり又は月暴怒して心を傷事なり
これとせりせハ秋必瘧とせり又寒水せり而と洗

ひはすく事といひ

夏月六味丸と服せハ月より始るのむ— 腎林集要に

去夏を腎氣丸より治し又夏ハ地黄丸と服と—
冬ハ味丸と服とるにせり— とせり去味丸腎氣丸

地黄丸ハ夏月— 地黄丸ハ去味丸に附し肉桂と

加しり多り又薛立斋の醫要に加減ハ地黄丸ハ去味丸よ
肉桂ハ味丸と加しり多り能く熱湯とせり

治と云々運程生はの力ありと去味丸より切更大
なり此の理家久— と服とるにせり— とせり

四月乃去候中一樓喘喘中二塩出中三玉凡生中

立夏の三候をり中ハ苦菜秀中ハ靡草死中
去夏秋ハ大中満の三候あり

立夏屋ぬ中六刻十分長中七刻五分中八刻十分小波昼又

十刻二十分長中十一刻四分 月令度義

五月

節とせし種と云中と夏節といふ○五月の夏節仲夏五月
節月 律と魁賓と云○六月の初節と云つたは田うら
あつた方りぬさる月と云と
曝せりと興の吹揚る月と云と

四日沐浴 糝と製ひし一餅糝と製するふさすらふと

用ひず糝米とここめくゆく一細米まぐ糝湯と
てまぬけり又沸湯少くゆり又うら米もら糝湯
分けてあまぐ糝一沸湯とて煮たり一丸ちまた
解るとい未と磨して引くはまら一餅はつつま
志くより一又糝と煮る糝米乃灰汁少く煮へ一也
月令塵氣よ見たり解け代は端午は糝を煮多
角糝。蒸糝角糝音糝糝丸糝ゆり糝と角はさくは

又糝れくく一又蒸糝れくく一又竹の角れくく

また糝乃糝のさやくは一 糝の色は糸と糝

かま糝糝のさくつあも有り 我園あもさる一糝とら
乃糸とせぬり糝をなれ

伊勢御修も人代しよりゆり糝とせとせると有り
又指送集十八の御書はゆり糝とせとせると有り 又たんこれと

さくして九はゆりぬるも有りゆり糝とせとせると有り

つむり先と角糝も角糝ともいふ有り今日まの

明糝糝と親戚も送へ一

○田信今日艾草蒲と屋れのまに扱む

扱とゆふ葉付記は五月有艾とむをひて人形

さくさくまらまらにくれの糝糝とさくさくとんえり

園信艾菖蒲とのまに撥ひとやかまきりさきも
弘仁式に五月三日平旦に菖蒲を衣とし菖蒲の
前よとくしおまへそ附よりまきけることり
又松芥扱よ五月四日壬午至夜露草内裏殿合菖蒲
ゆるゆるに控申細きる雄のきりよ 玉葉集
々やとくしおまへそ附よりまきけることり
ありぬるきまらわと

五日 端午と云又云あまふと子 ぬ籍紀より 龍九段上六行曆
端午餅又宋曝り表よいつく服惟仲秋日壬午志る時ハ凡端午
乃五月三日端午と梅と下い月又のとゆえうすしおまへそ附よりまきけることり
子まきり五月三日と梅と下い月又のとゆえうすしおまへそ附よりまきけることり
瑞午と梅す 園信今日松とくしおまへそ附よりまきけることり

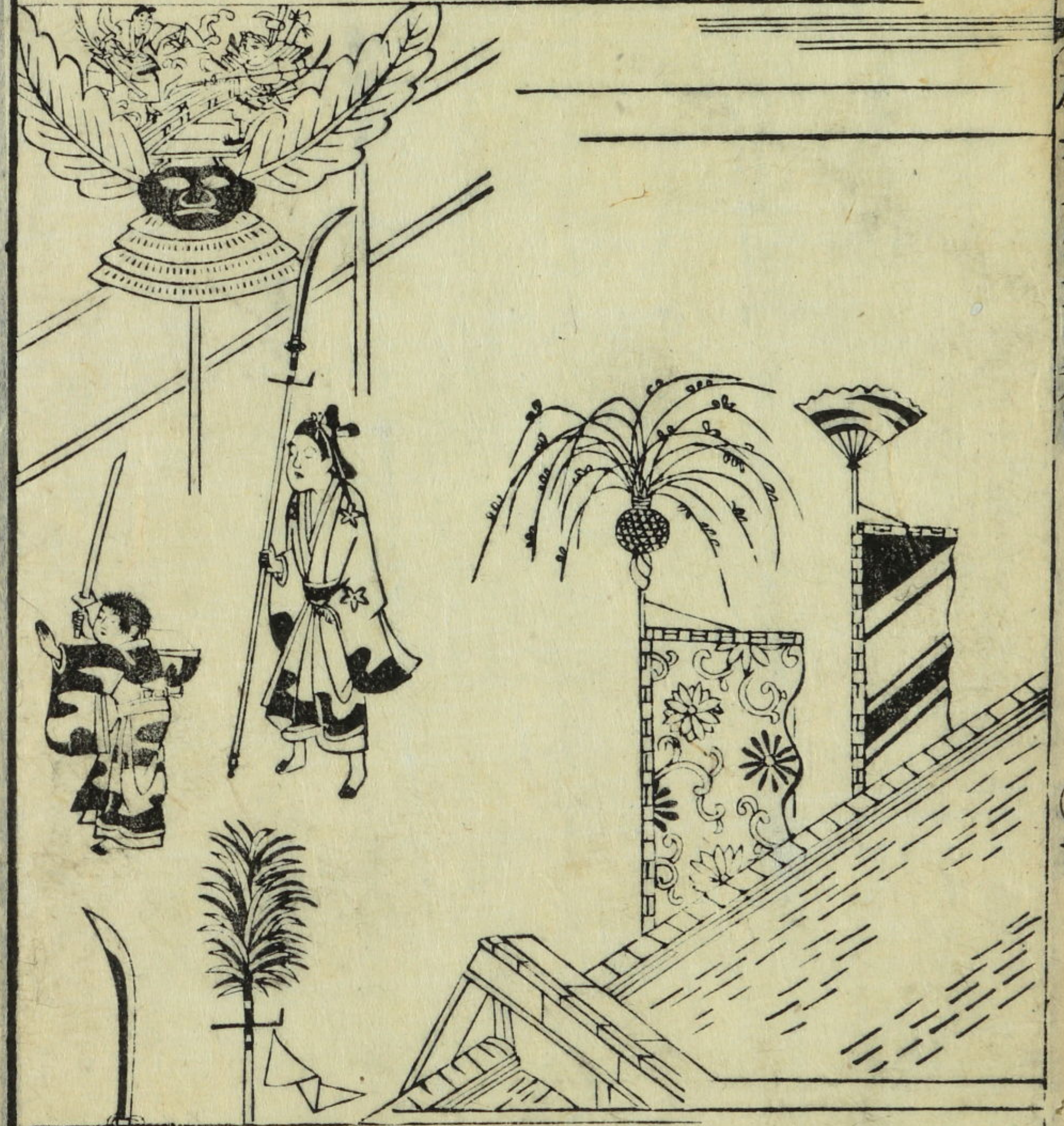
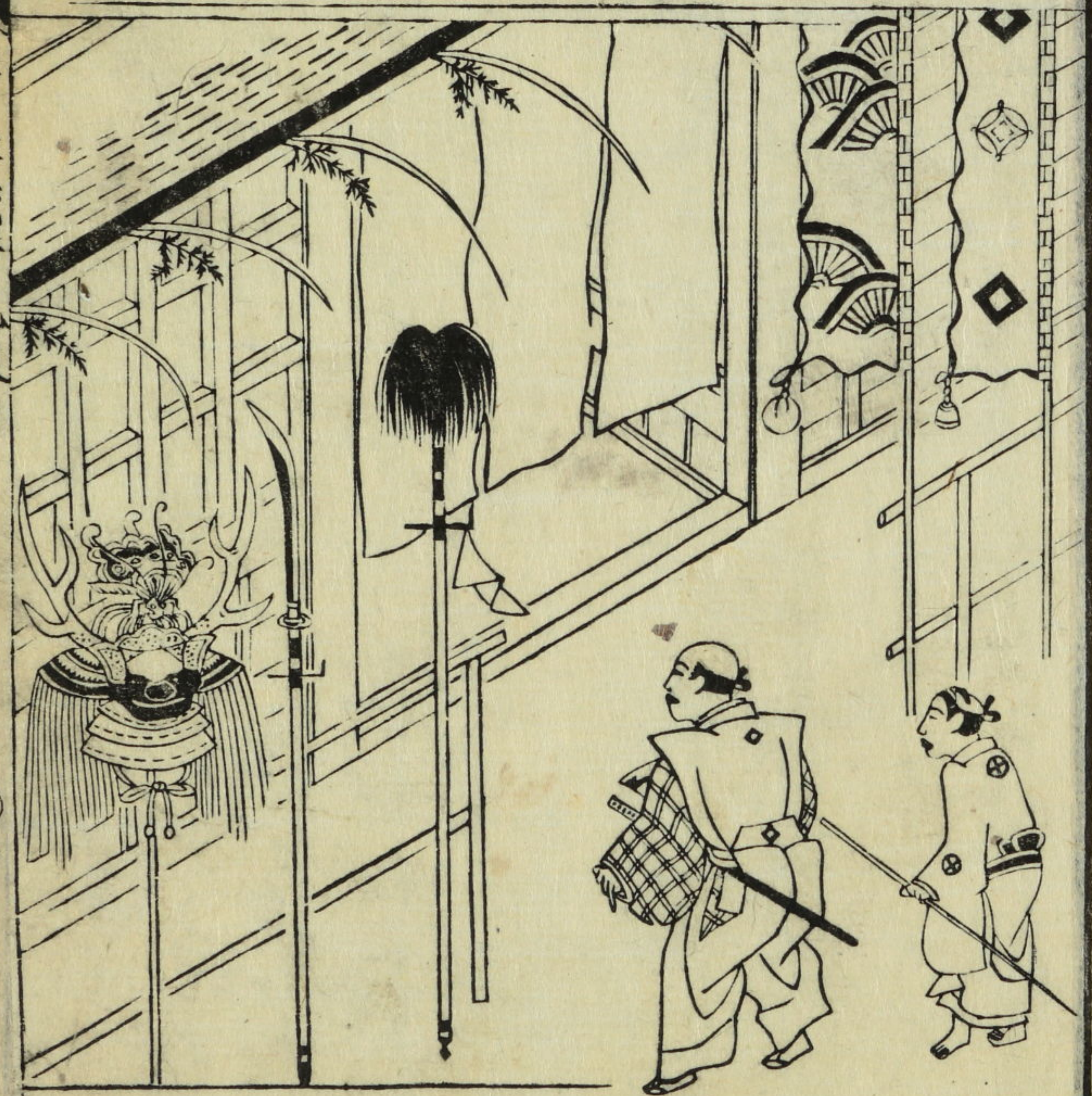
且今日より麻の衫衣とまき八月梅日よ玉葉

扱とくしぬる籍紀よりまき八月梅日よ玉葉
まきり油煎よ扱してをきと楚人これとあまきり
あは日にしりまきり竹筒にかみまきり野へまに
扱してまきるとまきり海濱の菖蒲の時よ玉葉
同といふもの海濱とまきりしにいつくまきりてこ
園信と名葉同よ扱くいつく菖蒲毎年いつくま
まきりたれりよ玉葉まきりまきりてまきり
扱きり乃とまきりよ玉葉まきりまきりてまきり
扱樹のまきりよ玉葉まきりまきりてまきり

縛へ一これ二物を絞つた乃やうくくおさりとせり
 今日粉と食ふいび忠と煮たりとく月令廣義と
 入屈系う婦名これとほくして屈系と取ひき
 取と刀をとり又粉を魚鬼よりくくしたるハ粉を
 切くこれと食ふハ鬼と降伏する義ありと長治の
 晴明く後より人えとりかやうの徳候とくといふ
 徳ありゆへに徳ありといふ人ハ周の風土記
 以下の菰葉といふ櫛米をくくして灰汁にて煮て粉
 さらこれ激湯にお裹志とくゆきく勿教せざりし
 ころころとゆりおまゐん西候といすま
 四月一日
 すあふ湯湯

包裹志とくゆきく
 勿教せず
 又菰酒酒とのむ事炭焼餅記と午
 日菰酒とくゆきく徳ありとくく一徳細米とて酒は
 うくてこれをの火の湯氣を助き午とのぐや
 といふ山酒九節乃菰酒といふとあん事於あり
 節ノ菰酒は酒煮糖練

○又ゆきく今日菰酒とて菰酒よりきくこれか新菰
 十粒とくると色れ糸やとくそのてひちちかか
 るゆりかちやとくか典藥寮あやめつとくとも
 又菰酒と御膳といくけくは群はとくはる事の
 ゆり〜〜也
 近表式る事根原はとくたり又梅とく
 菰酒ゆりゆり日あけ〜〜みえ〜〜り



梅すくふ風俗通よみ日五日五續乃多とりて
解よかれい色及鬼と通人をくして瘧疾とや
まきくむ一名を命纏一名いぬ色纏一名を
纏索といふと載り又提要録よ小人端午よ
雜錄といふと合致と纏ひ結髪と纏とよりか
るまきまきと

○又世俗よ今日蒸湯と用と沐浴とるなりあり
梅すくふ大載終よ五月五日蒸湯を沐浴也と
楚辭にも浴蒸湯兮沐芳華と云えり今此人の言
蒸湯と用と沐浴とるなりありと風をく

○又今日婦人女子たりまきと蒸湯と浴よ挿こ又
勝よまきふ如此といひ痛と痒くと俗よいひまきり
家時雜記の端午の日蒸湯艾と別て少人形と
併り又を菖蒲の根れとくこれと帯まの邪
をと辟と記せりかまき俗や玉作るや
くくく明神は是天中節旋舞當浴蒸湯解
又蒸湯の作よ玉蒸飯以艾虎懸

○今日家師家後乃秋あま幾言あり祓友七日の祓
潔斎として多ありそ敷て午是朔日よる乃まきと
ろく一二の敷とまきあり日よ秋末とまきとまきと

二つ又日ちりり勝夜乃本そそる場乃西の方に楓葉
 有り乞よりわきて落しりく勢とくれへると思ふす足
 指れ後人群集とる次故より坊れあつたのせめて
 大方の樹れ樹れのあつてんやとあつたんやとあつた
 時又横あかまのさつりりさつりりもの境れあつたに
 るらあつたさつりり樹をつつてさつりりさつりり
 乃らにさつりりらに群集れ中へけこあつたさつりり
 こつ小竹枝とつたさつりりさつりりさつりりさつりり
 ちのまのさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 横よまのさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり

鳥よあつたさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 りて川よとちかさまとぬくくさつりりさつりりさつりり
 濃霧と木のさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 さつりりさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 なつりりさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 我家れ火とさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 ひりりさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 ありりさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 記名ゆきさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり
 りりりさつりりさつりりさつりりさつりりさつりり

昨日の御言に於て人をもたつるに業はるの察は仰る
 む業とて競る事ありまふ今業を少く願ひ是は
 五りて競るとりやうやうへり競る事あり候式之を
 梅とゆふ文島雜紙を論半日走字體之藩柳と
 あまびやうとて今日るとまゝとてまゝの傍より
 〇今日之城紀伊郡深草乃里着れ森の末よりわ
 遣とまゝて競るあり此紙を延表式よつて書帳す
 乃紙社なり日本後紀よ鴨別雷神社に別也也
 とりとらふら又二所は皇子ともはばあまの
 ぶ良親王伊勢親王并上田親王也今日良親

ぬよりうひをまゝひつるは光仁天皇乃御業元直
 乃良國乃凶賊表末より守えられ天皇御之代
 御子も良親王に大御軍として御業ありとて宣
 分ありまふも尚抄より抄して六月の御言に
 志願ふ御業をまゝとて倭は大風吹來りて大海波
 をひあがし一もまゝに天賊一戦をも及ぶは御言
 ひもまゝとてまゝありびもそのも御言に乃出た
 御業の御言とまゝひけるも又都鄙の御言に今
 日書寫のかがこち力ともく御言を御言に御言
 ち御言の御言に御言の御言に御言の御言に御言

里村為記板と曾此形よりなる草菰の葉はと
ゆり或木と類也刃のこくまづりなまじして戸部は立
ゆり一の五年ハ風俗美巧と云のまて本とつて
くふ此形と云はる又よりこりて采女をかくさ
或甲冑と云はる也初戦ともくは戦闘ハ勢をたさ
知る戸部よりしてゆり先こりて又紙幣
ゆりくり徳とつたも也第一よつ者見と下るかよ
たきゆりこれとのかるとも或縁と用くもゆり或は
也菰をかくして是と似たハくとも朝日よりま
て思ふ此草と云

梅とるにそるこりてはこれと似る事ゆり
雜記ぬりて増平小部の人天師を畫して
又土あま天師をゆり艾と云はる也
ゆり草と云はる門よは垂又艾を採りて人乃
形にゆりて戸乃よはかくれハ毒草と云はる
ゆり
○今日まありせゆり事ゆり荆楚宋時記よは
ぬ日回民強よ踞百草又百まよと闘むゆり
ありと云るまゆりまゆりゆりゆりゆり
日本紀ハ菰菰とゆり也 菰菰ハ
これ事と云り

又草芳より得る今胡國草の宜男と有り歌る
 國より得る小共國今約律盈權百多の香こ有り
 百多の汁と持する熱く膏と膏蒸に記す
 五え百病瘡疔を貼して膏の膏葉よその功十倍
 せり又今朝日味お付百多と様汁とついで
 石原より和志と様と様とす一切の金瘡と瘡
 ひと月令度義より見えたり
 見えたり牛膝を脂と煮一澤漆
 毒葉の毒葉のりゆあり

○法葉草よとも五納り日あり又艾草よとも五納り

暮無といはく五月九艾と上包と瑞午よとも五納りといはく
 五日機也海百種

と他艾の苗よりとりてけりといはくと鐵葉草英に
 見えたりおにうら艾を化葉とす一又機河の
 くれの用へりひされも伊吹もくは性一又葉金
 機葉金丹千金機よかると合にりみも今日より
 ○又今日機葉と有り有りこれ機葉とともく遠志
 才の機河記よあり有り
 月令通考より述地者として記
 海に越王勾踐よ始りて記せり

石屏の瑞午の香よ

榴花角黍薦時新竹慶おと石酒橙堪笑江湖
 老穢客也隨蒿艾上柴門 又 友人
 海榴花上漲く有日如喜海泛濁醜今日猶疑

和之為元痛飲漢離強

十三日 以日竹と梅裁一 醫書に月十三日と作
照子又作速目より二日竹とうの黒いり
経の滞とあるなり

晦日 沐浴

以月 漢面よりこれと梅面よりつくと又徴面より切あり
梅面れ中肥之に某嘗石梅梅植をその枝とあるに
てさびく〜と月令度義より人をもつりは時を至り
つ〜 蓄菽水植とせむ甚しく滞又久病家入功を
〜にす之奴僕とて廢〜かこつていふ事

〜 梅面之森の中を此僕を〜して薦とあり
庭とほ〜と〜 薦を書に籍を食相多と梅
新に裁入る草木菜蔬よりひ焼屏を葦の
その功用慶〜又梅面水と大籠より貯至茶と勢
とれいといひつ〜と美なり〜と茶湯に足え〜り但日
と〜しては飲〜る妻又梅面より〜痛疥を治〜
〜れあり〜と〜と他〜とこれと用き〜
〜と〜衣衣何〜とこれと用れ〜所けの〜
茶垣り食物多〜と〜
梅面お入ひ紙綴〜して〜紙〜押紙

梅と為よ蜜蓋乃初に慶邪吏人の中陰代志年なり
思ふ難くとも一應事とのごとくとり予替す
中夏まひ七十二候乃肉を食むの才二候をまひ先に
備へて勤徳をとりなす

夏正の日并と浚水と改れに瘧疫をやまむと渾代乳飲
志よりとり又夏正乃後西丁に何る日支ぬの交
ととれいちにあつて今金方にちりたり

は月乃初善梅と乳皮と多り候と云籍より入火より
はりまき後收用く鳥糞と此皮あつてはやく取
へ又梅つり梅りとも製法へ

此月米苞を改米ぬへ一袋くはは苞ゆめいりりり
生ひ又夏乃乃拾穀乃所と多く米苞にぬりまひ
は月天極中腕もよ煮し是月のとて何りりり保身すへ
又梅干と保醬と一核致餘論よりとて古に於ては福
室の漢味焼く業に於ては香後也偶家今水二懸正極火土
之類也

月令よりとて是月也日長正陽陽年死生を思ふ所を
梅乃身母湯の勢色母或進湯湯母致不和者飲定ん乳又
日は月也その其も何可い事暇室の外の後りには
保身は保身とて是月枯井及深寒の中よりりりり

かり先離れ毛とあつたもの中にとりかきとれ毛
旋舞とらものまといりちこれ数りあり

此月並とくといかろり目と挿す全匠要略よりんえ

うり又煮解裡魚雜及未熟せざる果とくゆりかれ

鱈と鮑魚とせれどく食へくひ又枇杷と炙肉糞麩中

ねおしく食するありれ月令産義考者 干金方に藤麻の肉

と食するあり又全匠要略より六月沼中の傍水と

ゆりかれ魚鱈乃精涎肉にたり毛とのめい瘰癧たり

は月巻く一回に苗と挿す又圃に大蕪乃たねと

ゆりぬりよいとととあつて

又月のち候才一掃娘生才二賜始鳴才三及音世考

右芒種れ二候より才四麻角解才五掃始鳴才

六中夜生たるふり二候なり

芒種登去十刻二十分夜二十九刻四十分夜至登

去十一刻二十分夜三十分月令産義

六月

節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名 季夏及月宿 根を林檎といふ○青の和名とあま月といふといふなり

てととにあらわれつゝとつゝなり

朝日 賜冰節とあつく今日氷と食するなり梅とあつて

仁徳天皇れ六十二年五月に額田大中老皇子國體也

つらら結ふ毛凍よ二三日整氷沖こ三日約之凍
とより左徳小日立北流ゆ為氷為俵振親而出之
とより毛之れ氷流はと更も出ひるをといひあり
乃石垂結二伏の日氷井若結氷とより大
つらら一と報中記よとより
六日 結氷を製とより日なり若結はは毛より一に詳なる
こに記よ及び

十六日 日若やうとよりあり 結氷田葉初終よとるか
しやうハ吉祥とくらに仁明のと應とる花の比
る御代のさひさひさひのまゝに 中葉茂とのに

厚なるよをさうとつして心さうひたし於る
つらら六月十日若やうとよりあり 結氷田葉初終よとるか
かうくPまゝしてその口かゝられ報号をよめられた
て吉祥とよめやうとよりあり 吉祥とよめやう
しつとよめやうとよりあり 結氷田葉初終よとるか
よはり又結氷よの夜うい迄は世法よな傳らうと
大構の附よと月結氷のりさひひのりさひと揚
めらうもものしつとよりあり 結氷田葉初終よとるか
て合物と結氷とよりあり 結氷田葉初終よとるか
室の寧らふれ結氷とよりあり 結氷田葉初終よとるか

録の元年より十一年までの事一なる公十五歳河
 にはる今日へいふの事なるの候よえむなる
 ちれむ候たりあつたれあつたあつたあつた
 今按とゆは田事物終り候よえむなるの事
 事なる海よえむなるの事なるの事なるの事
 海は海よえむなるの事なるの事なるの事
 志は國史よえむなるの事なるの事なるの事
 候れ候れなるの事なるの事なるの事なるの事
 然と相の事なるの事なるの事なるの事なるの事

晦日 沐浴 け日 風月 とも 事 たり 世 徳 國 是 事 なる

是を神の御したるを穢さつる功徳の候りなり天
 成を皇の御河よりちりまのり大穢とよひ穢の
 候る百官の御たせむるの事なるの事なるの事
 ちめらとせし

此の月もあつた張ふ事なるの事なるの事なるの事
 の事なるの事なるの事なるの事なるの事なるの事
 の圓の御地なる

此の事なる候つた候なるの事なるの事なるの事
 候るなる候るなるの事なるの事なるの事なるの事
 集ふなるの事 又 是れなる事なるの事なるの事なるの事
 成なるの事なる

とのひらたをたふらにけりて又中位様とよらふたの國
 志とておれぬのよしんか異なり六月小正月のついで
 いらぬことありわかれりよな後代も月よありてよ
 幸とて後より又今日川原にせり麻たきりて
 人形とゆふもあかたててあてりてあてりて
 とておれぬよし

一 雲霞川のみあつてよきことありてよははりて
 志ぬにんをたふらり夕又夜ひりりなり後探
 小たつてよきことありてよははりて
 一 雲霞川のみあつてよきことありてよははりて



三十一日... 月晦日... 疑之古人... 作之... 強よ...

九月二十日... 休と六金氣伏卷其日...

九月二十日... 休と六金氣伏卷其日... 九月二十日... 休と六金氣伏卷其日...

梅面書く後書と日又晒さく一節薦よひん書表
 紙と下りて於て帯繩よぬる晒をい表紙の換す
 天氣好日ありとも一日に二夜たり一節晒
 一午未だは收む晒す六暴風の變りてや收
 せし一層かよあつて熱をさる一衣きて明
 朝家に初む凡書を晒す一衣よ多晒さく
 らの暴風のぞくあつ又多之れの家奴厭ひ
 憊く心と用ひし書とくこあふ何の換壞
 あつ修繕一断らるる事と猶ひ繕く書故の
 しく檜中に納書をせとせし書と用ひ

屋中に之しを晒さく一衣かかへて烈日に晒
 たり書もその溼あつて書く一毎年之し書せ
 ともく書け換壞さく一古人を書と初まきせり
 と尺さく一りもえは色あつて表紙も表紙と下り
 とはゆふよきくつは尺中の用よつて古人書と
 多に多く書書と用く書とさく今八七里書こ
 也なり
但せり書ハ山懸れり中書ハ又あつたり書ハ茶
 紙又細ハハち書りて
 又麿書と書厨の中よ入るハ書紙
 けく一はは擇眼を用かき又す

圖書を讀むも一時作日と晒さく一乞と書く薦書

梅桑歲時記卷四 三廿

後記衣紙をよのよに穿てし繩よりけ糸にかつる
 りし久しし繩すくくは圖畫のうらむとすまし一表
 とさすすへくひもさよひくかひ紙とさすひろくつ
 たるとさすへく一繩よをきき力と能やまし一これ又
 ぬぬとれぬぬとすゆ 道をはばくは四月の月梅敷のあは書
務衣紙をよとさすまし一書い第一入
ふとさすひ書圖衣服をいへくつはすひかひおす
梅敷色ていすては墨染よ墨をれてくひつるよめとさす
 甲冑色も布りもめ布とさすひて中何とくくは烈日
 晒すへく一久しを晒すへくくは晒すへく晒すへく
 て後墨日晒すへく一細く一
 衣紙をよし晒すへく一芝絹を久しを平くくす又黄緑紅

ぬぬの色をばやうある物々日よ晒すへくすこれと晒せし
 久くくは物影おさすよ及月衣乃くひて色つきたるよ
 冬丸の汗よひく一洗へく一を痕ち又枇杷のさぬを
 すりて細糸して洗へく一細糸をくくは居衣西用よ
 を梅敷よのびくは衣服よハ梅敷をを穿して洗へく
 わく又居衣を袖よくく凡衣服の墨よ洗ふよとさ
 ぬ代皮と細糸一張茶と墨かよ合せくくは上よ
 ひきりくも温湯してさめしてよくくくは付くは後
 洗のくく一又新天南星とさす絹のけくくは
 ぬぬとれぬぬとさす白紙とすく付て洗てもよく一油し

着くられたる衣服とハ滑石天竺粉各等分を末して
 付粉與する所ハ又付一むねよきひいて自然落又
 洗する亦ハ碎粉とひ移りけ藥麩汁とてこれを
 のきいとれしより又審と用て洗すより一漆
 こけりきして下衣服と洗すハ杏仁椒等分を金
 研爛して洗する亦ハ擽く淨く洗すハ落又血
 汚る方衣服とハ冷ぬすく所ハ落又白衣と洗す
 下蘿蔔ハ煮汁又ハ薑湯を細末して水
 に入れて洗すハゆるなるなり 以上丹書必收
 新に述るる薬性をも細く包ちりて口とひりて

目小あてて晒し一むねぬす方薬ハゆるぬす日一平下
 千金方にさく薬とさく日一平下さくれ薬力
 うとくたるをまひ當時用ひさる薬ハ到日一平下
 新瓦器に入さくすはと封し用の付子に割て多
 又封す一一年をあらせし新一むねぬす一丸散乃
 薬をぬすはと一むねぬす凡人薬と薬ハ貯へる保
 護とれらる薬はたすの事を志し次薬を丸人を
 其は病をとり物なれはを薬して收めたるは平
 乃ぬすはと一むねぬすはと一むねぬすはと一むねぬすはと
 入ちり新瓶を多く他を薬と今日と洗ぬ

口より出づる一舌一舌といふは久しうして心づ
 うせは見え事とたゞの良法あり地裏白芷露飯
 鬼活ひ其神曲貴甚昔年あるに時暇されハ
 へる物たりする物志をこころゆるふれ氣味り
 ともくたのゆあり

悪物を蝮へいよみのハ尖る物とてうすに板をし
 へる物れ数日は胸のつかれとて一日は暇へては
 感下乃壁に懸るて一筆をも筆はらぬとて
 およけ垂る一舌一舌といふは久しうして心づ
 へる物れ数日は胸のつかれとて一日は暇へては

物中更久の五倍子鉄架とて養深る有長とて凡
 字と收るは其板ハ貴甚の整湯をいふ軽粉と
 澱へ取れとていへて乾くと結るとこれと收む
 ことと終ては極すハ石ハ川椒と貴甚と糞
 汁とく松煙とともり第一改を滌気又丸と
 潜座敷あるよとて又煎乃汁貴板の汁をよ
 浸してや一舌一舌といふは久しうして心づ
 撞候と入重ハ板ハ凡とて洗つハ整湯と
 日月をぬく糞と極すハ乾くと結るとこれと收む
 へ一舌一舌といふは久しうして心づ

...

...

魚鰯食をすと井中より上げてときい撥せは
月令度よきあるせり又五月生肉と取りて麵を
うぐいのこころおき肉とすりかきよつこ油の中へ入
るは久しと撥きひ麵を餅とあして食ふよりしや
よき味あり見へり又鱒魚味を新造するよき酒
と濁し煮いけきよ

夏月よ煮したる菜とよき味とけい味とわきあて
性何くきり酒も又煮りてとくりよき味と能く
ふ種とけき井の中よこころおき味の中へあに
ひらりおとよけきよ

酒もゆめいこころ

此月山林よ虫お取を薬と多く飲貯し山林を
取を多く買貯し一虫ぬれ味あり割て焼て
よし又炭と買貯し

菜瓜と多買し煮し一脯と焼し

○乾瓜とこころゆめ法 瓜とすりよきかこころ
瓜乃片をこれの丸八九多を塩と入一夜中とつけ
翌日おかしらゆめゆめと一日こころゆめゆめ
久しゆめゆめ又煮貯しゆめゆめゆめゆめで
後ゆめゆめ

○凡と糟淹よる法 世俗よ常につけと云凡と云
 母より子孫と云くうらとこそありけりひてあ氣
 乃才たやうよかえり凡る片入れの内よ塩ハかめ
 不と入凡あつくちれ分目を入桶よ入よくととて
 け二粒おだくちかーと塩けりてあひて塩け
 けかきくばあきく日よやーと凡よ糟を多くぬりけ
 せとよ糖よ入すて凡のつとあわぬやうにして
 うよ塩とあわれありしつとくにまきり糖よも塩ぬ
 ませくより一たび糖よと塩ぬ合ふとませくより
 糟多く凡とくたれたがゆ凡多く糖すくたれたゆ

俗の熟より子に凡とはく凡おかきとつとるやが
 生ととり籠のゆり風ひぬちりあつとてとと
 赤玉あきぬりぬき一桶たひひるゆ凡る世え
 ちんつけるるる一桶よつあつとてとと
 男とよくちんぬ凡ハれくちつとつとつと
 くり一、二粒おだくちかーと塩けりてあひて
 けきけけとあ糟よはくれハ糖よなり
 瓢菓子かきと平抱りて塩淹して貯まへ
 ○乾瓢の惣は好天氣とゆうひゆあつとと皮と
 多くとて糖よ切そ切ちと各うすくしむまりて

糸より八寸後糸を引て繩よりけりかひよりりへ
 天幕ありくつたのこく氷より入氣好時糸
 繩よりきくちひくし能ひる時臺よりよ入るめ
 糸より一丈代こく引て後沸湯よりけり又かせり
 糸より能ひるしととも味おさる
 ○塩干甄乃製法 甄と大片よ切増よつけて押と
 くりきよとりても日れてる時糸かきりて後つや
 入り納まきあり味者の人よりせり中より製
 ○乾煎子の法 日りの煎子と糸波と去るよりり
 て中並利の時煎子より糸とくひりて

小加へ

物をお煮する煎子と物煮る煎子の原

○紅豆塩淹の法 米粒をゆき塩四升を合し口
 のこ煎子と煮るとよ漬とけり久しく換せり煎
 子も又かくれりくさる

ひ月餅油餅や細きなると製法より

○醬油乃製法 大豆 大豆 塩 各一石 水 二石二斗は

煮てつる 先大豆とあつとろく粗白くを煮つてついで
 石臼より引り大豆と煮大豆よりろく煮て大
 豆代粉とろくをせ痛煮よしろく煮よ入麴と
 不す麴塵の結分る時右に石二斗よりあり塩

一石と入れ大釜あつくよく煮るを鹽湯と大くはさま
 してわき火をひいてしをあつとさかかしたる時瓶を
 他へ入るりさめてもよく他へかきよく^{ラシラセ}拌初より
 煮た内よをふるうりしあつ又日加よを煮ても後
 同よを入るりあつ水入して出か入いふらうへ他へ入
 るりかきよく煮と入へへ右代^{シラセ}分^{シラセ}を少くいふ米を
 又水の中入粥を煮て塩を斗入よく拌せし御冷なる
 河太れ初め他瓶よ入るりさそり殺て十日かよく湯と
 してよく煮るるり桶のこらうよ^{シラセ}穴とわきを桶
 ようよく煮たりもよくしよるいせしと煮てし初

作り一日たり元七午あつを^{シラセ}してはらつたりなり
 洗しちりりよく湯を味換したるよ昆布と切て食の
 味よくなるなり

〇ひらの煮法 大豆 七午 大麦 七午 塩 三斗 水 七斗
 煮たかりやしくゆくつりよく煮てし^{シラセ}豆ハ炒て引る皮
 と煮まきし物に煮せし^{シラセ}とよくしてし^{シラセ}入^{シラセ}入^{シラセ}入^{シラセ}入^{シラセ}
 たる時水と塩とつよく煮てまきし^{シラセ}瓶よ作りたる
 作りたる後日^{シラセ}能^{シラセ}日^{シラセ}に^{シラセ}り^{シラセ}味^{シラセ}を^{シラセ}る^{シラセ}時^{シラセ}日^{シラセ}へ^{シラセ}瓶^{シラセ}の
 只と能^{シラセ}を^{シラセ}た^{シラセ}事^{シラセ}代^{シラセ}ぬ^{シラセ}き^{シラセ}さ^{シラセ}り^{シラセ}わ^{シラセ}り^{シラセ}事^{シラセ}入^{シラセ}り^{シラセ}志^{シラセ}く^{シラセ}さ^{シラセ}れ^{シラセ}ん
 味よく煮たり瓶よ小煮よ入るりあつ食なりと^{シラセ}瓶

とくく一筋の口と志をく平くつくす

○漢方紙豆の製法 大豆を少し小麦粉を先に入れ
とくそ豆れく煮熱し小麦の粉とをきく
み入麩よりすりきりきり水きり塩を半分だけ
梅を入きり一たれ麩とくをきり塩汁の内へ入
煮く生葉の椒皮薄皮をきりきりきりきり
気とを麩と一たれ塩汁の内へ入きりきり
をきりきり塩汁をきりきりきりきり
て半日かきりきりきりきりきりきり
煮てきりきりきりきりきりきりきり

○又納豆の法 大豆を少し小麦を少し塩を少し大豆とを

豆れく煮く煮とすきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきり
大豆を入きりきりきりきりきりきり
よ入てきりきりきりきりきりきり
白胡麻陳皮をきりきりきりきりきり
口よりきりきりきりきりきりきり
○金の青鼓の製法 和州産の紙をきり
又西京西用とあり大豆をきり
引きり皮と志をきりきりきりきり
能きりきりきりきりきりきりきり

の大をとりつゝして蒸し熱したる時細末の石粉
 と拌せ土をよへ入粉せし糊するはそを麩麩の分
 一ふつ日おひ蒸か 如て厚くし切りの 白灰 これと吉田がし
蒸かすもや 合右蒸子と灰とと甲合の塊を合せ桶に入せしけ
 一夜蒸明り上よりおろす多とを麩麩をひいて一灰蒸子と
 糊をいれおろせし桶に入せしきとせしめしと
 け星毎日一二夜うけしをせ十日作して後苗考
 以柳皮の粉種麩を蒸種と能やとよ切き拌又おの
 ころころとてまるとしけ星毎日いれおせ十日
 ころ用一三四十日よ及の味つくる後おろ

五徳いんをきろぬへり好まよふなり

○蒸年礬の製法 礬と酒とを合せ壺に盛
 置くはとちひひけ月去月乃中壺おろしゆ小豆
 炭日又礬一七十日とてこれと用ひそのひき
 たるを酒と水とを分つて入毎夜おろしひひひひ
 ころを又方石礬といふなり又葛粉の蒸と割ておろ
 して入せの礬をよとぬるとりゆり葛粉礬ともよ
 目利のり時礬をよ換壞したる牆壁を修理し一又
 海塩の毫を早とる何井と流し是泥とよきと
 白沙を入へしぬれぬ味とよよくなる

凡刀細陰也刀鑽者其月之夜もぬくはされの鑽也
尤常の所もよりぬくはすく又日月多鑽の所
キととみぐく一

夏月故也と志法 養水 星本 蟹仁 雄黄 研 竺

細末して密して煉丸とて急火よこれと焚くと居家
必用よらとて又龍の骨と焼ハ蚊咬死するを
骨よりとてとて川魚の骨ハ焚之ハ防蚊と志又
流萍と着流とと焚てとて月令廣義よ刀を
しり又千金月令よ六月は流萍と取之陰平よ
一雄黄よとてと焚之ハ蚊を辟と志るなり又日月

又日田中の浮萍とて丸物乾し一依是れ血とてこれな
潔し又胸し又漬すめけとるる蚊を殺して後末して
香とる一熨之たよ蚊と志と居家必依よとてとて
麻の葉とけりやとてけり蚊ととるる物蚊を殺
とよ刀をとり和後ハ樞乃末とたくこれ又とて蚊と
とるるものなりとて蚊ととるるものなりとてとる
たりとて古今集志の類よ

又刀をとりとてとてとてとてとてとてとてとてとて
たりとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

宋回祥扇摩羅志物被蓋物被除

○又蠱多と云わいほくならむと殺茶をひてふよかく
をい蠱夾くきと物形お威志と見えたり又蠱多と云
より膏薩乃素と糜乃布よひ移り又云ふるふら素と病
つたてゝ麻と云くしくと月令廣義より見えたり

夏月乃り世人異言小あてゝ色赤白或途中中少く偽
痛く死すり事ありこれと中腸と腸死すと小俗も
これと胃氣といふあやすりなるは病人といはれそひ
やとるい仮いやはるが如し病とるものなり温湯とよ
ぬくいもそよむしく腹の病とありさしそひ一そひ
途中より死し人あやなはるるの路上の勢と云ふと名

膈腹の乃りまゝの人をけてるの上に居せり又薑と
大蒜とつち燗り一換湯とて送下せば即活それ後
薬とありてい候事と云一

夏月乃り天氣熱くく海汗成熱精力劣也とるをこふ
生脈散と服す一病とありを病と治すは消暑散
湯參芪益元湯等と服す一又夏月は薬と服
さく生脈散に代一と方書より見えたり
黄芩 芍药 人参 白朮 芍药 各一分
甘草 五苓 麦冬 各一分
加茯苓一分 祁藹一分 煎服
右十味也
後續者ハ 宜とて代也

凡熟粟乃時糲膏と保元して濃て穀油とるるかんれ
 身也保元とて六月まね入房勝似まね膏膏又涼主人
 うとく夏時穀氣肉に伏し暑毒外と蒸すらんま
 甘く同よあがり冷物と食ふ亦暴池に遊と生ら温
 暖才の物と食飲して大に飽るらん
 園菜たけのこ花菜なすなすの目よしてむみ多と濃よたけのこ洗よ收
 て夕るもよ洗へし一日守の甚しう河水とそけい
 冷糲まお通て花井なすたよ枯ると月令廣義たけのこ又
 老圃なす乃云咲よ地事なすさめけり何多と洗へしたけのこ子
 洗くよしと但晩よおろく漢朝なすよとや洗へし

月令廣義よとて六月は桂橋よ水とろくたけのこ土とてなす茅
 の原なす羊の糞と糞なすハなす多し
 秋のは颯風吹なすあそくハ何くくめそなす休なすとなす松なすと
 圓く一茅心乃なす梅となす堅くとて又なす梅なすとなす休へし
 月並と食ハ目となす羊肉とてハなす郭なすとなす傷
 聖鳥なす層なす鷲なす菜なす菜なすと食なすよとて又なす生なす菜なすと食ハ水なす癩
 とすハ大のなすぬなすれハなす終なす身なすとすハ冷なす食なすとなす茶なす
 周し冷水生なす破なす果なす油なす臟なす甜なす食なすとて食なすすなすらんなすらん
 凡糞炒なす燻なす食なすハなす厚なす味なす皆なす宜なすくかく用へし
 凡夏乃なす甜瓜なすとて食なすするらんなすかんれ凡のなすあなすて沈なす

月令廣義

用也出令金とれ万より使士の火よさせくる成よる
 の去月と云く可く土まればすすきく金をまひ
 成よ秋乃金と土より生ずるあり来月を火金の
 有めり又一案の中なるれ中央の土一令を
 去よ揚そめりの席とがひ乃と成よ月金も
 去る此次の中央の土とのきり
我國俗之用の日月と
いふ事あり去れ
 トありしその後をこれい
これのたすきなりや
 信悦よ去月去月よ入口蕪及赤少豆と令食ハ痘瘡と
 群と今の人ばよくさる事ありされハ源氏物語
 乃事本れ去よこくおちれさうやくさすりや

信ノ字紙の後まきやくを蕪とありとされハや
 下りみさけの多きをこく志うまるとうれおれと去
 群は中者よ蕪吹りこく勢人西月その食五穀と
 以麻下厲氣信蕪葱韭蒜薑也又肘洗骨に元日及
 人日麻子少豆名七枚と香を疾疫を消すこり
 これる案初のみこなりし事とありえりか
 事と傳へあやまりて去月よすりや群抄載り
 人よるぬり
 去月去月の内は蕪とさう塩と対折まへ
四つとわり
 去月去月の内は蕪とさう塩と対折まへ
四つとわり

血乃久しきやまざるも用とくを以ての強^{ツキ}なり
 衰^シえたる病人は用多能^{ツキ}弱^{ヨク}と強^{ツキ}と弱^{ヨク}と用^{ツキ}なり
 此^{コノ}書^シは^ハ一^トく^ニ考^ヘて^ナす

日本書紀卷之四畢

